

エピソード

……合衆国政府と強いつながりを持つライトエンド社は、兵器の製造や武器の生産だけでなく、時に軍事関連の業務を担うことがある。それは合衆国外における兵士の募集であったり、戦略物資の輸送や軍事施設の警備や要人の警護、敵対者の暗殺、偵察や諜報、さらには戦地での建築活動などで、金銭次第では保有する私設軍隊を直接他国に派遣して戦闘行為をおこなうこともある。

一九八八年、合衆国の隣国ナパナ共和国で軍の一部と極左ゲリラが結託してクーデターが発生したことがあった。共和国第一空挺師団と精鋭ゲリラ部隊の同時蜂起によってナパナ政権が倒されそうになったが、この時、ナパナ政府を助けたのは、合衆国軍ではなくライトエンド社の私設軍隊であった。

当時のエボル合衆国は、反戦平和主義を掲げる国家平和党が政権を担っており、国軍の対外派兵には極めて消極的だった。しかし、反戦を掲げる政権であっても新エボル政権が倒れることは容認できなかったため、ライトエンド社に多額の金銭を支払ってナパナのクーデターを鎮圧させたのだった。

企業への軍事活動の依頼は、合衆国にとってもメリットが大きい。国家正規兵の血が流れずに済むので政権批判は起きにくいし、捕虜を取られて政治的な交渉の材料にされる恐れもない。それになにより、戦費だけでなく、死傷した兵士やその家族に対する弔慰金や保証金、戦没者年金を支払わなくて済むので、財政的にも安上がりな

のだ。

もちろん、合衆国政府から委託を受けた戦地への派兵は、それを引き受ける側のライトエンド社にとっても大きなメリットがある。

まず第一に、支払われる金銭の額が膨大だ。一度に数百億、あるいは数千億エボルドルの収入は、それだけで企業を潤わせるし、株価の暴騰材料になる。

第二に、現地での「戦後業務」を独占できる。ナパナの件ではクーデター鎮圧後に軍務関係の業務を独占し、恒久的な収益源となった。なにせクーデターの後、ナパナでは正規軍が解体され、ライトエンド社が国防関連の事業を一括で委託されることになったのだから。

そして第三に、これがもっとも重要であるのだが、戦場で新兵器や最新式の武器を使用して実戦データを得ることができる。これが大きい。カタログスペックは優秀でも、いざ実戦に使用したらまったく役に立たないという事例はたくさんあるのだ。これは軍需企業にとって大きな問題である。

以上のことから、合衆国政府より軍事活動の依頼があった場合、ライトエンド社は喜んでこれを引き受ける。そして今回、シルバースター航空に対するテロ攻撃で、ノゼルダの反政府勢力に対する「報復軍事作戦」の依頼がきた時、ライトエンド社はふたつ返事でこれを了承したのだった。開発に成功した生物兵器の破壊力を試すために。

「……はい、はい、ええ、準備はできています。先遣投入する八五体のジュージェルダ・グローズの脳には、すでに制御用のマイクロチップを埋め込みました。それと、リアルタイムの戦闘データを

得るための生体カメラも頭部と胴体に移植済みです。はい、はい、その点は大丈夫です。ミニーニャ・ノーバ上級主任の協力によって、ジュージェルダ・グローズは随時生産されておりますので。はい、はい、では」

そう言っただけでクロスノイドは、確認のために直接電話をしてきたライトエンド社の最高経営責任者との通話を終えたのだった。

そして彼は薄く笑った。

「ふふふふ。いよいよだ、いよいよ妖獣兵器が戦場で暴れる時がきた。ふふふふ、ふふふふ、いよいよ地上に地獄が出現するのだ。楽しみだ。ああ、楽しみだ。ふふふふ……」

クロスノイドは幼い頃から他人には言えない願望を内に秘めていた。

それは破壊願望であった。

壊したい。壊したい。人を、物を、秩序を、理を、倫理を、道徳を、正義を、平和を、そして何より世界そのモノを、破壊したい――そう、強く思っていた。

別に世界に恨みがあるわけではない。彼は裕福な家庭に生まれ、幼い頃からなに不自由なく暮らしてきた。両親は公務員だし、他の兄弟たちも医者や弁護士になっている。だが、その平和な家庭において、彼だけが異質な存在だった。だからこそ、彼はライトエンド社に入社したのだった。

なぜならば、ライトエンド社は、「世界に破壊と殺戮」をもたらす「悪の企業」なのだから。

「ふふふふ……」

そして彼は視線を横に向けた。強化アクリルガラスの向こう側へ

と。

すると、巨大な肌色の肉袋が視界に飛び込んできた。大きい。とてもなく大きい。直径が数十メートルはあろうかという巨大さだ。パンパンに膨らんでおり、青い血管が肌に透き通るように浮かびあがっている。これが「何」であるか、頭上を見上げなければ、一見では理解できまい。まさかこの巨大な肉袋が、いま現在もなお、書類上はクロスノイドの上司であるミニニャ・ノーバの慣れ果てであろうとは、巨大肉袋のてっぺんにうつ伏せになって鎮座している本人の姿を目視で確認できなければ、たとえ説明を受けたとしても、信じられるわけがなかった。

「んほおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお
おツツツ！ 産まれりゅツ、またうまれりゅううううううう
ううううツツツ！ んぐほはああああああああああああ
ああああああツツツ！ イぐツ、イグいぐツ、またイツぢやう
ツツツ、うううう産みながらツツ、出産アグメぎめぢやううう
ううううううううううううううううツツツ！ んはああ
ああああああああああああツツ！ んほツ、ふほツツ、ふぐほ
おおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお
おおおおおおおおおおおおツツツツツ！」

イキながら、絶頂アクメを決めながら、またドバドバと新たな妖獣兵器を産み落とすミニニャ・ノーバ。その身体にはたくさんの管がついており、必要な栄養素は全てそこから供給されている。もはや経口で摂取する必要はなく、その口は、いまは咆え叫ぶためだけに活用されていた。

「んはああああああああああああああああああああああ

あなたが私の上司で良かったと心の底から思っておりますよ。ふふふ。ですから、これからもよろしく願いますよ。末永く、ね」

ミニーニャ・ノーバはこれからも妖獣兵器を産み続けるだろう。卵子が尽きるまで、永延に。そう、まるで女王蟻のごとく、産んで産んでただひたすら産み続けるのだ。

悪夢的な出産は、これからも続くのである…………。

完